

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

『プレゼンス・アフリケーヌ』研究（2）テキスト・思想・運動

2020 年度第 2 回研究会（通算第 6 回目）

日時：2020 年 9 月 5 日（土）13:00–18:30, 2020 年 9 月 6 日（日）10:30–15:00

場所：マルチメディア会議室（304）

使用言語：日本語

共催：共同利用・共同研究課題「プレゼンス・アフリケーヌ研究（2）テキスト・思想・運動」、科研費基盤(B)「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」研究代表者：星埜守之（AA 研共同研究員，東京大学）課題番号：17H02328）

9 月 5 日

13:00-15:00 関谷雄一（AA 研共同研究員，東京大学）

「シェイク・アンタ・ジョップ『熱帯下の警告』再考」

15:00-17:00 佐々木祐（AA 研共同研究員，神戸大学）

「『民衆』革命と文芸誌：80 年代ニカラグア・"Nicarúac"誌をめぐる」

17:00-18:30 全員

打ち合わせ

9 月 6 日

10:30-12:30 佐久間寛（AA 研共同研究員，明治大学）

「マジョムート・ジョップ『唯一の解決策：全面的独立』」

13:30-15:00 全員

総合討論

概要

2020 年度第 2 回研究会を上記の日時およびスケジュールのもと開催した。当初は対面かオンラインかの二者択一を考えていたが、対面会議をオンライン参加者に Zoom を用いて中継することが技術的に可能であると判断し、対面とオンラインの併用型の研究会として開催するに至った。司会は両日とも中村が務めた。

9 月 5 日の第一報告は、関谷雄一 AA 研共同研究員によるシェイク・アンタ・ジョップの論文「熱帯下の警告」の読解であった。本論執筆の背景にあたる 1950

年代中盤の西アフリカの政治状況を振り返りながら、本論の構成と各論を跡付け、その内容を概観する報告である。「アフリカの産業化」という一大事業を見据えながらエネルギー問題を科学的見地から論じ、これを来るべきアフリカ連邦構想に結びつけていくシェイク・アンタ・ジョップの本論文は、21世紀におけるアフリカのエネルギー問題（水力、火力、風力、原子力）を考える基本的視座を提供していること、そして、アフリカ連邦構想という（未完の）政治的プロジェクトを明確に提示している点で、1950年代中盤の西アフリカ研究における基礎的な文献であることが確認された。

同日の第二報告は、佐々木祐 AA 研共同研究員による『『民衆』革命と文芸誌：80年代ニカラグア・"Nicaragua"誌をめぐって』である。ニカラグア革命を経て成立した革命政権による公的文芸誌「ニカラウアック」は、1980年から87年のあいだに計14冊刊行された。「詩人のくに」ニカラグアにおいて特徴的であったのは詩作が識字教育と結びついていたことである。このため公的文芸誌にはそうした民衆による詩作が掲載されている。本報告は、有名作家による作品ではなく、むしろ無名の人々の詩作に注目し、「新たな人間」という革命政権が掲げていた理念に呼応した「自己価値創造」の意義を読み解くとともに、ジェンダー、エスニシティ、宗教、暴力にまつわる、ニカラグアの内的矛盾が詩作においても表出している点を指摘した。

9月6日の報告は、佐久間寛 AA 研共同研究員によるマジョムート・ジョップの論文「唯一の解決策：全面的独立」の読解であった。FEANFの学生メンバーとして1953年に『プレゼンス・アフリケーヌ』誌の特集号「黒人学生は語る」に掲載された本論は、1950年代の西アフリカの政治状況を考えた場合、きわめて早い段階で即時独立を掲げ、同化を徹底批判したことで知られる。報告ではこの論文の全訳（試訳）に基づきながら内容を概観した。植民地独立が国際共産主義に先行するという明確な態度が示されていたこと、「パンネグリズム」の造語のもとでネグリチュードを批判し、むしろ民族主義路線を提示するなど、その急進的な立場は、アルジェリア革命期のフランツ・ファノンの政治思想とも呼応するものがある。報告の最後に提示された「1989年現在、セネガルは独立していません！ 政治的独立を完成させ、現存しない経済的独立をうち立てる作業がまだ残っています」という、独立を未完の独立と捉える1990年の当人の発言は、第1期に本研究会が掲げていた「新たな政治＝文化学のために」の問題意識を改めて照射するものとなった。

以上、3つのいずれも力のこもった発表を受けて活発な質疑応答が行われた。このほか、研究成果の報告の計画、本共同利用・共同研究課題の最後にあたる次回研究会の計画を練った。

今回の研究会には、1日目に18人、2日目に16人が参加した。

(文責：中村)